

臨床獣医師から見た

養鶏業界 35

株式会社ピーピーキューシー研究所 加藤 宏光

鶏種の変遷

産業としての採卵養鶏には、外来種の導入が不可欠でした。そもそも、外来種を日本へ紹介したのは、業界を先導した、故・所秀雄氏で、彼が注目したのは、アメリカで市場を席巻したハイライン種でした。

当時高校生の著者も、週刊誌の特集記事で漠然と知りました。外来種の成績は、それまでの在来種と比較すると問題にならない高生産性であったと聞いています。著者が業界に接した昭和四十二年頃には、やはりアメリカを出自とするデカルブ種やカナダからのシェーバー種が勢いを増しはじめていました。

間もなく、マレック病の大流行で、圧倒的シエアを占めていたハイライン種をはじめとする、多くの外来種がシエアを落とすことになりました。一方で、マレック病に抵抗力のあったソンバー種がぐんぐん市場を広げました。

しかし、昭和四十七年にこの感染

症のワクチンが市販され、同病の被害が治まると、個卵重がほかの鶏種に比較して小さく、生み上げが遅い、という欠点が致命的となり、いつしか、この鶏種は消えていきました。

その後、産卵重量の多いシェーバー種が圧倒的シエアを占めて一〇年余りが過ぎました。シェーバーのシエアはピーク時には四〇%に近い数値を示しました。しかし、圧倒的な強みを誇ったこの鶏種も、一〇年ほどで育種の寿命を迎えたのか、デカルブ種に主座を明け渡したのです。

採卵鶏の鶏種とブーム

著者がコンピューターのプログラムに取り組んでいた約一〇年。日常業務は、生産現場を巡回し、鶏のコンディションを監視するとともに、スタッフとの会話から現場の空気を読み取り、オーナー（多くは社長）とのディスカッションで種々の問題解決を検討するお手伝いをする、というものでした。

午前一〇時頃から巡回を始め、社

長との面談が終わるのは早くて午後七時、遅ければ午後一〇時を過ぎることもしばしばでした。それから、研究所へ戻るのに、平均一時間、到着時刻は遅ければ、夜一時を回ります。プログラム作成は、あくまで自分の勉強が目的ですから、帰ってからの仕事です。ひと通りプログラムを作成して、帰途につくのは、午前二〜三時もまれではありませんでした。とはいっても、養鶏生産の管理業務の重要性は何にも勝ります。この間に、いくつかの鶏種に対するブームが通り過ぎました。

特筆すべきものとして、

- ・ローマン鶏
 - ・ハイラインW77
 - ・エッチ&エヌ
 - ・デカルブTX
- などがあります。

これらのうち、わが世の春を謳歌したものもありますが、あだばなどして散ったものもあります。

中でも、現在は白色採卵鶏で大きなシエアを占めるジュリア鶏（ローマン鶏→現在五〇%余りのシエアか？）は、最初にデビューしたのは、昭和

《コラム1》

【鶏種の遺伝的寿命】

昭和54年当時、それまでビッグ・イーター、ビッグ・レイヤー（よく食べ、よく産む）として40%を上回ろうとするシェアを占めていたシェーバー種に異変が現れはじめていました。折りしも、IBの変異型ウイルスが話題に上りはじめた頃で、とかく産卵成績の上がらない問題はIBのせいとされがちでした。

とある農場では、全ロットをシェーバー種でかためていました。何しろその頃は、大玉志向の時代で、飼料コストは4万5,000円/トモしていましたが、多く食べてもエッグ・マスが大きければ経済性が大きいのが当たり前でしたから、シェーバー種が好まれていたのでした。

しかし、著者が臨床獣医師として生産現場に直接接しはじめた頃、その農場における生産性が落ちました。思い当たる節もないため、当然経営者は鶏病を疑います。依頼を受けた著者は、IBをはじめとした種々の感染症を疑い、詳細に検査しました。およそ1年に渡り、考えられるすべての感染症を調べた結果、この生産性の低下は育種上の問題と結論づけました。といっても、確たる証拠があるわけではありません。

“鶏病が原因ではない”と確信したこと、当時はオープン鶏舎で、給水はかけ流しであり、エサは不断給餌で飽食状態であったことを考え合わせて判断したわけです（今日では種々の飼育条件が変化しているので、短絡的に判断することは難しいでしょう）。とにかく、経営者へ鶏種を変更することを勧めました。

結局、鶏種を変更したことで、成績はみるみる改善されました。野外においても、常にコントロールし、状態を検証し続ける姿勢の重要性を痛感した一案件でした。

当時の育種は、いくつもの種を保持し、それぞれの系統が保有するメリット要因を組み合わせる経験的にテスト鶏種を作成し、成績を検討することで開発されていました（コンピューターを用いた育種はデカルブ社で開発されたと記憶しています）。

当時は「こうした形質は10年程度の期間で保持が困難になる」と語られたものです。特に急速にブームを巻き起こした鶏種では、供給が必要に追いつかなくなるため、本来なら廃棄対象となる部分も商品化しようとする傾向が疑われます。突然ブームになった鶏種が期待に応えられないで崩れ去るのには、たぶん人間側の事情が絡んでいたのではないのでしょうか？

六十〜六十一年で、当初こそ二五%を超える占有率を占めました。当時わが国に大流行したIBD（鶏伝染性ファブリシウス嚢病）感染による影響が大きく、急激な生産障害によって、アツという間にブームが過ぎ去りました。

その後、五年ほどかけ改良された末、ジュリア鶏として、再上陸したのでした。再上陸のテストロットはめざましい成績をおさめたのですが、再び到来したブームで三〇%に及ぶ本格導入のロットでは、散々な成績であり、このブームも瞬く間に過去のものになりました。

W77は、概して飼いやすい鶏種として、静かなブームを起しました。この鶏種は、喧騒性が著しい点が欠点でしたが、成鶏編入後の残存性と、高くはありませんが長く続く産卵性能で、一定のファンができました。しかし、この鶏種は、ハウユニットが低い上、個卵重が大きすぎることで、飽きられてしまいました（後にローラとして再デビューしたのは、この改良型です）。
エッチ&エヌについて言及すると、

比較的小玉鶏種であったこの鶏種は、大きなシェアを占めることはありませんでした。ただ、卵内質の良いことから、ブランド卵生産者に好まれました。不思議なことに、この鶏は、好成績を示していても、キヤッキヤツとノドにエサでも詰めたように奇声を上げるのでした。それ故なのか、供給元は、育成期間にMGワクチンの接種をすすめていました。いわく、「この鶏種は呼吸器が弱いから……」とのこと。

著者は、「本来、呼吸器が弱い特質が遺伝的にある」という説明には、釈然としないものがあります。

デカルブIXは、軽量種で産卵率も高く、さらに要求率も他鶏種に比べて非常に低かったため、ブームになりました。

しかし、飼料の摂取が極端に少ないにもかかわらず、高産卵率を維持するため、ハウユニットが低いことで、やはり占有率を下げました。

また、この鶏種が衰退したもう一つの原因があります。それは、鶏ふんの軟らかさでした。当時、著者は、この問題を深刻に受け止め、デカル

ブ本社までディスカッションのために出かけました。

この問題は一般に、鶏種の特性として理解され、水様軟便のために嫌われる傾向が目立ってきていました。一方、著者は、同じ育成ロットが二カ所に分割された場合、同じ仕様の鶏舎で飼育されても、必ずしも両方で水様軟便で困るとは限らないことから、鶏種性質以外の要因にも配慮すべきである”と考えました。

残念ながら、その後、間をおかず、デカルブ社がイサ社に吸収合併され、この問題は立ち消えとなりました。

鶏種の改善

現在は、ハイライン社や、エッチ&エヌ社などがドイツのローマン社に吸収され、またデカルブ社がイサ社に吸収された上で、ヘンドリックス社に買収されるなどの経過を経て、独立して、競争力のある育種会社が数えるほどになりました。

これまで、育種会社では、初産日齢を早めること、卵殻強度を高める

こと、ハウユニットを改善することあるいは残存性を良くすることに日夜努力を重ねてきました。

ちなみに、三〇年前の平均的な性能を列挙してみましよう。

①初産(五〇%)…一六〇〜一六五日齢

②殻強度…三・五kg

③ハウユニット(HU)…二〇〇日齢では、九五〜一〇五↓三〇〇日齢で八五

④減耗率…〇・五〜〇・七%/月

これらは、三〇年後となる今日では、

①一四〇日齢前後(この改善は経済性に与えるプラスの影響が大きいのです。例えば、平均個卵重を六〇gとすれば、一kg/羽以上余分に生産することになります。一万羽で、一〇t以上の差は経営に大きな影響を与えます)

②野外ではさほど大きな変化はありません

③HUを平均値で一・〇上げる育種改善には、三年ほどかかるそうです。現在HUが高いことを特徴としている鶏種にはバブコック(B400)

やイサ・ホワイト(ISW)があり、ます

⑤鶏種による減耗率の差異は明らかで、ハイライン・マリアなどは群飼環境でも残存率が高く、減耗の多い鶏種に比較して生涯で六〜八%も優位性を有することもあります

ブロイラーの変遷

当時から円高傾向が明らかとなりはじめ、国際競争における農業の立場が微妙になりかけていました。養鶏業界ではブロイラー産業において、輸入製品とのコスト競争に焦点が当てられてきました。

著者は、その頃ブロイラーの産業形態に改革を要すると主張していました。『国際競争を踏まえ、わが国の産業はすべからず競争に勝てるノウハウを育てなくてはならない』と確信していたからです。

この時期には七十歳を超えるレーガン氏が大統領となり、強いアメリカの再現に力を注いでいたのです。ブロイラー肉と同様に、アメリカ産

の牛肉と国産牛肉も競合する運命と噂されていました。

著者たちが輸出型農業を見学するという命題で、デンマークやオランダをはじめとするヨーロッパの国々を歴訪見学したのは、ちょうどこの頃でした。この見学チームは国民経済研究所という機関の主催で実施されたもので、生産サイド、行政、商社、学術関連者およびコンサルタンとして国民経済研究所のメンバーで構成されるという触れ込みでスタートしました。しかし、当時豚価が低迷していたためか、採卵養鶏業界からの生産者のみが参加者でした。

『来る国際化の時代がどのように訪れるのか』を知るために、先進的な採卵養鶏生産者たちはこの見学に大きな期待を寄せていました。また、来るウルグアイ・ラウンドに備えるための体制を説いた国民経済研究所の加納氏の『わが国における輸出型農業の模索』という論説に、大いに興味をひかれての参加でもありました。

